

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

「環流」する「インド文化」： グローバル化する地域文化への視点

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-02-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 三尾, 稔 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4904

「環流」する「インド文化」 ——グローバル化する地域文化への視点

文・写真 三尾 稔 みおみのる

研究戦略センター准教授。「現代インド地域研究」国立民族学博物館拠点代表。共編著に『人類学的比較再考』（国立民族学博物館調査報告90 2010年）、『インド刺繍布のきらめき：バシン・コレクションに見る手仕事の世界』（昭和堂 2008年）、『装うインド インドサリーの世界』（千里文化財団 2005年）などがある。

都市の健康ブームとヨーガ

インドの都市の社会変容と宗教実践を研究して10年近くになるが、地方都市でも中間層を中心とした暮らしの大きな変容がさまざまな局面で感じ取れる。彼らの嗜好にはグローバルな都市文化の動向に合致する面があり、それは健康ブームにも現れている。かつて中年の肥満は一般に豊かな暮らしを、特に婦人の場合には豊満なる女性性を示すとしてむしろ望ましいこととされたが、その身体観にも変化が生じている。「シェイプアップ」が英語のまま尊重される価値となり、ウォーキングをする中産階層の男女が目立って増えているのである。私のフィールドである街では近くの湖の外周道路が早朝ウォーキングの人気地点となり、歩きに来る人が急増したため朝の時間帯は車両通行禁止になってしまったほどである。

このような健康志向との関連で、最近人気を集めているのがヨーガである。多チャンネル化したさまざまなテレビ局からヨーガのポーズを教える番組が放映され、それを熱心に習う人々が増えている。ヨーガ番組の時間帯は、かつてはさまざまな宗教の聖者の説教が中心だったが、それを席卷する勢いである。番組では、簡単にヒンドゥー的身体観が説明されるが、ほとんどの時間はポーズの取り方やそれと健康との関係の説明が中心である。テレビ・ヨーガの視聴者に聞いても、その関心は腰痛や高血圧に効くとかシェイプアップに役立つといった健康向上や、気持ちがすっきりするといった心理的効果にある。心身の健康のためポーズを教えることを主眼に置くヨーガ教室も、近年あちこちに見かけるようになった。テレビ・ヨーガにせよ、教室でのヨーガにせよ、これらの実践は「私たちインドの」健康法であることが強調される。習い手たちに聞いても、「ウォーキング」などは西欧のものだけれど、ヨーガは私たちのもの（国産とか地元産を意味するデーシーという言葉で語られることが多い）だからなじみやすいし、やりやす

いという発言はよく聞く。

実際、ヨーガがインド発祥であることは間違いない。しかし、ヨーガは本来インドの宗教哲学に根差し、宇宙の最高原理であるブラフマンと個我の根源アートマンとの合一の境地を得るための実践技法であったし、その実践においてはヒンドゥー的な神々の名の詠唱も重視されていた（山下 2009）。近年都市で流行しているヨーガは、この宗教的な部分が脱色され、近代的な身体観に基づいた健康のためのエクササイズ的一种になっている。

地球を一周するヨーガ

このような、ヨーガの意義の変質とリバイバルは、一見インドという地理的空間内部での中産階層の成長や、それに基づく身体観や嗜好の変化に基づいた「伝統」の再興や再創造の過程と解釈できそうに思える。しかし、加瀬澤の論考が描いているように、このプロセスはもっと複雑である（加瀬澤 2010）。インド発祥のヨーガは、植民地期に西欧由来の心身二元論の影響のもとで解釈され再構成された「近代的」ヨーガに変質した後、1960～70年代の欧米のサブカルチャーの一部をなした「神秘のインド」趣味の需要に応えるように輸出され、そこで欧米の消費者に受容されやすいように改良された。当初はインド出自の聖者やインドである程度修行を積んだ欧米の人々が古来の姿に近いヨーガ実践の道場を開き、「神秘のインド」に関心を寄せる人々に教えていたのが、そこで学んだ人々がさらに教室を開いてゆく中で、欧米の消費者にわかりやすく実践しやすい形に変容していったのである。この20世紀後半バージョンのヨーガは特にアメリカで人気となり、ヨーガの「本場」はアメリカと目されるほどになった（山下 2009）。現在、インドの中産階層の間で人気のヨーガは欧米に輸出され、改良されたヨーガが再びインドに戻ってきたものなのだ。

移出され、変質し、還帰してきたヨーガは、しかし、変



会員限定のクラブでシェイプアップにいそむ女性たち
(2005年、アーメダバード)。

容した形でヨーガに関心のあるインドの人々には「私たちインドのもの」と捉えられている。またいかに変質し、「本場」がアメリカに移ろうとも、ヨーガはインドで学んでこそ意味があるとインド以外の人々に捉えられている節がある。というのも、加瀬澤や山下が指摘するように、インドで、インド人以外が教師役をつとめ、生徒の多くもインド人以外というヨーガ教室も次々に出来ているからである。これらの教室は、古来のヒンドゥー的な実践が継承されているインド北部の山岳地帯などヒンドゥーの聖地に集中する傾向がある。古来の宗教実践と現代的な変容を経た身体技法の実践が併存する状況が生じているわけである。加瀬澤によれば、ヒンドゥー文化の純化に基づく国民国家建設を目指すヒンドゥー・ナショナリストの間では、欧米版のヨーガは純粹ではないとして否定し、古来のヨーガを本来のインド文化として再興すべきであるという運動も生じているという。地球を一周して戻ってきたヨーガは、その発祥の地で「インド的なもの」の意味づけをめぐる争いの焦点になっているのである。

「環流」する「インド」文化

現代インドにおけるヨーガの流行やその意味づけをめぐる問題を考えるとき、従来のインドあるいは南アジアといった地理的空間内部の出来事としては、これを捉えきれないことは明らかである。ここには地球大での人・情報・モノの流動とその相互影響関係のもたらす文化の動態、すなわちグローバル化の作用が大きく働いている。しかし、ここでグローバルに流動する文化要

素の動態を見ると、これが従来の多くのグローバル化論に見られるような(たとえばLatouche 1996; スミス 1998; ギデンズ 2001など)、欧米を中心とした基本的には一方向的な人・情報・モノのフローという見方では、十分に捉えられない傾向が生じていることにも気づかされる。ヨーガの場合、その起源は欧米ではなく、従来のグローバル化論では周辺に位置づけられるインドであるし、そこから発せられた文化要素は地球大の流動の中で各地の文化と相互作用を起しながら徐々に変質し再度発信地であるインドに戻ってインドにおける文化状況をさらに変えている。つまり、流動する文化の方向が一方向的ではなく、周回する形になっているのである。また従来の多くのグローバル化論が、グローバルに、しかし一方向に動くものの価値は(たとえば金融システムや市場原理であれ、民主主義的政体であれ、ファッションや飲料のブランドであれ) 普遍性を帯びたことが強調されるのに対し、ヨーガの場合は流動する先でさまざまな相互作用や意味内容の変質を引き起こしつつも、どこか「インド的なもの」という意味づけをもって周回している点にも特徴が見出せる。

このような挙動を示す「インド」文化はヨーガだけではない。たとえば、5年ほど前に国立民族学博物館の特別展で取り上げたファッションもその好例である。ファッションの場合、欧米で流行したエスニック趣味に乗ったインド出身のファッション・デザイナーが、インドでも辺境的とされてきた地方の衣装の着こなしや素材、デザインを創造的に作り変え、まず欧米で好評を博し、それがインドに戻って「私たちのファッション」として中産階層に受け入れられ、さらに変質してゆくというプロセスが見られる(杉本 2005)。ここでもインド



上掲写真と同じクラブにある、インド伝統医療に基づくマッサージ室。ヨーガと同様、環流してきた健康法として人気が出ている(2005年)。

を発信源とし、グローバルにフローした文化要素が、受け入れ先で相互作用を起こしながら、再度インドに戻り、インドの状況を変えてゆくというプロセスが見出せる。しかも、ヨーガの場合にはコロニアルな作用による変質が植民地期にかなり受動的なプロセスとして起こっているのに対し、ファッションの場合はコロニアルなまなざしや嗜好による文化の変質が、インド人自身の手で戦略的に遂行されているのである。

また宗教実践においても、ヒンドゥーの聖者が欧米等世界各国に赴いたり、電子メディアを使ったりして布教につとめ、海外で増えた信者がインド本国での聖者の教団の教勢拡大のために資金援助や布教の先頭に立つなどの事例が増えてきている。インド発の宗教観が海外で生活する者の信仰実践と共鳴し、それがインドに再反射してインド内部の教団活動にも影響を及ぼすようになってきているのである。

筆者が代表をつとめる人間文化研究機構「現代インド地域研究」国立民族学博物館拠点の研究プロジェクトにおいても、ここまで述べてきたようなグローバル化とインド文化の絡まり合いの解明が大きなテーマになっている。このプロジェクトでは、グローバル化の中でのインド文化の動態が従来のグローバル化論では十分に捉えきれないため、「環流」という概念を新たに立てて研究に取り組んでいる。

環流は、従来地理学で海流の地球規模での流動を指して用いられてきた語であるが、地球規模で周回し、その過程

で変容をしながらぐるりと戻ってくる、という文化の流動性を表すためにこの用語を転用している。以下では、グローバル化研究の中で近年提出された類似の概念と比べながら、「環流」という概念の着目点や特色をもう少し詳しく述べてみたい。

グローバル化と環流現象

グローバル化と人類学というテーマを正面から取り上げた『文化人類学』75巻第1号(2010)の特集冒頭で特集編者の湖中が述べているように、「いまや人類学であろうとなかろうと、[中略]グローバリゼーションという概念と無縁であることのほうがむしろ困難な世界にわれわれは生きている」(湖中 2010:48)。この特集では、その中で人類学がグローバル化状況の単なる証人であるような研究ではなく、グローバル化が進む状況やグローバリゼーションという概念自体を対象化する研究視座の検討が湖中ら5人の研究者によって行われており、グローバル化の中での地域文化の動態を考える上でおおいに参考になる。しかし、特集の中の研究の多くはグローバルな人・情報・モノの流動に対して一定の地理的空間を占める社会がどのように交渉しつつ、グローバル化状況を乗り越えているのかという視座からなされており、グローバル化論の暗黙の前提としてあるグローバル化の中心、すなわち欧米からのフローとは異なる文化のフローへの注目という視点は取られていない。

その中で床呂の提唱する「プライマリー・グローバリゼーション」という視座は、グローバリゼーションの複数性を強調する点で、インド文化の「環流」の議論を考える上で示唆に富んでいる。床呂は、初期近代以降に起源を求め、西欧を中心として一種の「中心-周辺」関係の中で展開する「大文字のグローバリゼーション」とは別に、起源において近代以前から存在し、必ずしも欧米を中心としないグローバリゼーションが認められるとし、それを「プライマ



ショッピングモールに集う若い女性たち(2005年、チェンナイ、杉本良男撮影)。

婚礼のレセプションの招待者。白い衣装はこのような機会には着用しないものだったが、先端ファッションとして認められるようになってきた(2007年、チェンナイ、杉本良男撮影)。



リー・グローバリゼーション」と呼んでいる(床呂 2010:122)。床呂によれば、「プライマリー・グローバリゼーションは、大文字のグローバリゼーションと並びつつ大文字のグローバリゼーションとは異なったゆっくりとした速度で持続

し続けている現象」(床呂 2010:125)である。床呂は、このプライマリー・グローバリゼーションの代表例としてイスラムを挙げ、論文の後半ではその特性を検討している。

インド発の人や情報・モノのグローバルなフローは、古くは仏教文明やヒンドゥー神学の中央・東南・東アジアへの伝播、中世のインド洋海域交易における重要な地位(家島 1991)など、近代以前から存在しており、現代においても欧米中心のグローバルなフローとは異なる独自性を有していることから、プライマリー・グローバリゼーション的な性格を有していると思われる。しかし、インド文化の環流現象の場合には、床呂が指摘するプライマリー・グローバリゼーションよりも複雑な大文字のグローバリゼーションとの絡み合いを考えなければならない。床呂の論考を読む限り、2つのグローバリゼーションの間に具体的にどのような相互関係が展開してきたのかについてはほとんど言及がなく、2つのグローバリゼーションは基本的に別々のレイヤーとして相当程度の独自性を保って持続するものと想定されているかのような印象を持つ。

インド文化の環流においては、床呂の言う「大文字のグローバリゼーション」との近代におけるコロニアルな関係を考えないわけにはゆかない。コロニアルな関係のもとでは、近代以前のインドをネットワークの一部とする交易圏は支配者であるイギリスの通商ネットワークのもとに再編されることとなった。また、インドを代表するとされる文化や社会表象はこの時期に世界的に流通するに至るが、これらは「大文字のグローバリゼーション」の中心たる西欧において、ほとんどインドが関与することなく代理表象され

たものである。これは、食文化としての「カレー」にしてもインドの特徴的社会制度とされる「カースト」にしても同様である(コロニアルなフィクションとしてのカレーの成立については辛島 1998を、またカースト概念の成立と流布については藤井 2003を参照されたい)。両者ともインドの現地語にはこれらの表象に完全に一致する言葉すらないものが、コロニアルな力関係のもとでインドを代表する文化や制度として構築され、世界に流布した。この結果、カレーの場合は、インドでは代理表象とはまったく無関係の食文化が現代においても独自に展開するという皮肉な状況が生まれているし、カーストの場合は構築された概念が現地社会に導入され定着させられた結果、厳しい差別社会が生まれ、それが現代にまで禍根を残すという事態を生んでいる。インドの伝統的宗教とされるヒンドゥー教もまた、近代以前の神学をベースとしながらもオリエンタリズム的な言説の展開の中で再編されたものである(ヒンドゥー教のオリエンタリズム的な構築については van der Veer 1994を参照)。

現代インド文化の環流も、このようなコロニアルな関係の影をどこかに引きずりつつ(コロニアル期に成立した理解がさらに現代的な変容を見せているヨーガの場合を見よ)、その関係において生じたオリエンタルなイメージを逆手に取って進行している。そもそも環流を支える人や情報のネットワーク自体も、近代以降のコロニアルな関係性のもとで生成発展したものを基盤としている。だが、現代における環流では、文化を表象し流布させる主体がインドを出自とする人々のネットワークとなっている点で、コロニアルな自他関係とは大きな違いが見られる。また、流布



地方都市郊外の雑貨屋。国外資本によるグローバルな商品（携帯電話やコカ・コーラの看板がインド中にあふれるようになったのは、ここ10年ほどのことである（2009年、ウダイプル郊外）。

した文化が単にオリエンタルなものとして消費されるだけではなく、現地文化を多少なりとも変化させてゆく力を持ち得ることに注目しておきたい。ヨーガは、近代的身体観によってかなり換骨奪胎されたとはいえ、西欧近代の医療や身体観に対するオルタナティブな視点を提供し、その視点を補強することに貢献している。また世界各地でのヒンドゥー聖者の活動は、基本的にインド系移民によって支えられてはいるものの、現地の人々の間にも信者を増やしている。いまは少数かも知れないが、それが現地社会のマイノリティー・グループとして彼らの価値観の承認を求める運動などに発展してゆけば、現地の社会や文化の状況をさらに変えてゆく可能性を持っている。要するに、「環流」という視点による文化のフローの研究においては、多元的な中心からの文化のフローの歴史的・政治経済的な複雑な相互関係により注意深くアプローチする必要がある。「大文字のグローバリゼーション」とそれとは異なるグローバリゼーションは、きれいなレイヤーをなすのではなく、もつれ合っている。そのもつれ合いを丁寧に腑わけしながら、環流の全体像を明らかにしてゆかねばならない。

この点、床呂とは別の視点からグローバリゼーションの複数性を主張するリッツアの論考も不十分である。リッツアは、グローバル化には、グローバルなものと同ローカルなものとの相互浸透によって特定の地域での独自性が生じ得る glocalization (グローカル化) と、国家、企業、組織などの帝国主義的野心によってさまざまな地域に居座り、これら主体の権力、影響力、収益を成長させようとする globalization (2005年の邦語訳ではグロースバル化) とがあることを指摘し、基本的にはこのグロースバル化のもとで「無」が拡大し消費されるようになると論ずる(リッ

ツア 2005。よりコンパクトでオリジナルな議論はRitzer 2003)。ここで言う「無」とは、オリジナルな論文で言う nothingの日本語訳であり、特有の内容をほとんど欠いており、中央で構想され、管理されるモノ、人、場所、サービスなどを指し、具体例としてはファストフード・チェーン、コカ・コーラなどが挙げられている。彼の議論では「無」の反対物である「存在」(something)、すなわち現地で創造され、管理され、特有の内容に富むものであり、多面的な人間関係に根ざして生産・消費される、たとえばある地域特有の料理店や地域特産物などもグローバルに流通する可能性が指摘されるが、二次的な重要性しか持たないとされ検討の主眼にはなっていない。これはリッツアの関心が現代社会における消費に向けられていることが一因であろう。「環流」が注目に値するのは、むしろリッツアの言う「存在」がグローバルに流通する局面が生じ得る点であるし、これが世界を循環するときに単なる消費の対象となることなく相互作用を起こして先々の状況を変え、また発信地の状況を変える可能性を持つ点である。文化を単なる消費物とあらかじめ規定するのではなく、環流する人・モノ・情報どうしの相互のもつれ合いにこそ焦点が当てられなければ、その可能性はすくい取れないのではないかと思われる。

環流研究の課題

インド発の文化の環流への注目がグローバル化研究にもたらす可能性について考えてきた。「環流」はグローバル化現象の複数性を強調するものであり、中心-周辺図式を暗黙の前提とした一方向的なグローバル化論を相対化し、地域の独自性や文化的主体性をグローバル化の中で捉えなおす視座を与えるものである。概念自体新しく、具体的な研究成果を問うのはこれからであるが、グローバル化の中で従来の地域概念そのものが流動しつつある現在、新しい地域研究の視座を開く可能性を持つものと考えている。残さ

れた誌面では当面考えられる課題を、インド発の環流研究に即して記しておきたい。

その課題とは、環流による「地域」の拡散ということにある。文化の環流状況のもとでは、インド文化の動態を従来の地域概念の枠組みの中だけでは捉えられない、ということは先に記したとおりである。「インド的なるもの」自体が環流する状況にあっては、地域の自明性も揺らいでくることになる。この状況の研究には、インドのみならず世界各地で「インド的なるもの」が、どのようなコンテクストでどのような力の作用のもとでどのように構築されているかを丁寧に解明する必要がある。その解明には、人類学的な調査手法や視点が有効であると思われる。それらの研究を突き合わせることで、環流状況における「インド」像とその作用が解明されるだろう。これは従来の地域研究とは異なるが、グローバル化の中で地域アイデンティティ自体が揺らぎつつも存続しているとしたら、そのありようそのものを問うことがまずもって特定の地域の研究には必要になってくるはずだ。

「インド的なるもの」の存立は、当事者の「意識としてのグローバリゼーション」(ロバートソン 1997)という問題にも関わってくる。床呂はイスラームのプライマリー・グローバリゼーションにおいては、ムスリム自身に自分たちを脱領土的な共同体の一員と想像する意識や言説が持続していることを指摘している(床呂 2010:127)。インド発の環流においては、当面当事者の意識はインドというネーションの想像や再想像に収斂してゆく傾向が見られ、それ自体としては脱領土的ではないように見える。「インド」は近代以前においては、ネーションではなく、より範囲の広い文明世界を指し示していたはずだが、イスラームのようなかなり明確な理念や原理によって統合された世界とは性質が異なっていたと思われる。それにしても、歴史的持続としての「インド的なるもの」という意識が、現代において環流す

る「インド」とどこかで接続しているとしたら、それは現状のネーションに収斂するような「インド」意識を乗り越えるような意識の生成に向かうのではないだろうか。このような課題を考えるためには、「インド的なるもの」の存立の歴史的展開過程に注目した研究が必要となってくるだろう。

環流にせよ、プライマリー・グローバリゼーションにせよ、グローバル化の複数性を可能性として認めることは、比較の可能性を開くことでもある。上記のようなイスラームの状況とインドの環流の対比はすでにその比較への第一歩になっている。将来的には多元的な環流を、それぞれの特性に基づいて比較することも十分可能と考える。その可能性を念頭に置きつつ、新しい視点からのグローバルと地域文化研究に取り組んでゆきたい。

【参考文献】

- 藤井毅 2003『歴史のなかのカースト 近代インドの〈自画像〉』岩波書店。
ギデンズ、アンソニー 2001『暴走する世界—グローバリゼーションは何をどう変えるのか』佐和隆光訳 ダイヤモンド社。
辛島昇・辛島貴子 1998『カレー学入門』河出書房新社。
加瀬澤雅人 2010『身体と医療』田中雅一・田辺明生編『南アジア社会を学ぶ人のために』pp. 236-248 世界思想社。
湖中真哉 2010『序 『グローバリゼーション』を人類学的に乗り越えるために』『文化人類学』75(1): 48-59。
Latouche, S. 1996. *The Westernization of the World*. Cambridge: Polity Press.
Ritzer, George. 2003. The Globalization of Nothing. *SAIS Review* 23 (2) : 189-200.
リツア、ジョージ 2005『無のグローバル化 拡大する消費社会と「存在」の消失』正岡寛司監訳 山本徹夫・山本光子訳 明石書店。
ロバートソン、ローランド 1997『グローバリゼーション—地球文化の社会学論』阿部美哉訳 東京大学出版会。
スミス、A. 1998『ナショナリズムの生命力』高柳先男訳 晶文社。
杉本星子 2005『ファッションのインド・モダン』杉本良男・三尾稔編『装うインド インドサリーの世界』pp. 30-31 千里文化財団。
床呂郁哉 2010『プライマリー・グローバリゼーション—もうひとつのグローバリゼーションに関する人類学的試論』『文化人類学』75(1): 120-137。
van der Veer, Peter. 1994. *Religious Nationalism: Hindus and Muslims in India*. Berkeley: University of California Press.
家島彦一 1993『海が創る文明—インド洋海域世界の歴史』朝日新聞社。
山下博司 2009『ヨーガの思想』講談社。